

私の「英文学事始め」

井上義夫

一橋大学名誉教授（昭 44 経、昭 47 修社）

昭和 40 年（1965 年）、小平（前期）1 年の必修英語の授業に用いられたテキストは、山川喜久男先生の授業が Charles Dickens, *The Great Expectations*、山田泰治先生が Arthur Miller, *The Death of the Salesman* だったと記憶する。「小平プリズン」の異名をもつ四角い校舎の一階、玄関を入った右側の部屋がその教室だったが、二階には一室を改造して 25 基ほどのブースを置いた名ばかりの「LL 教室」があり、後者の授業では時折その戯曲が演じられるままの台詞を録音したテープを聴いた。

『大いなる遺産』のテキストは、本場の香りを漂わせた、ペンギンのペーパーバックには珍しい上品な装丁だったし、ディケンズのこの長篇小説はイギリス文学の canon に分類される作品だから、このときの授業が、私が生のイギリス文学の世界に入る戸口になった、と云えればいいのだが、無論そうはならなかった。生きの良い 50 数名の青年男子と（女子学生は学年に 5 名しかいなかったから、当然のごとく私のクラスにはその片影も見えなかった）重い長机と長椅子の詰まった場所で、生気澁澁とは言いかねる先生がひたすら英文講読に励む世界は、「文学」には程遠い日常の世界だった。

2 年度は、増谷外世嗣先生が John Wain の短編集、斉藤忠利先生がボールドウィン (James Arthur Baldwin) の短編集をテキストに使い、サザランドという妙齢のアメリカ人女性が授業を受け持ったが、この人がどんな内容の授業をしたかについては、不思議なほど記憶がない。1947 年に始まったという AFS 交換留学プログラムでアメリカに留学した学生がクラスに二人いて（そのうちの一人は外務省に入り、アジア大洋州局長を務めたような男で、後年田中真紀子外務大臣の委員会での答弁を手助けしているのをテレビで見て懐かしかった）もっばら彼らがサザランド氏と議論するのを聞いていたためかもしれない。

これらとは別に、2 年次には選択英語のクラスで F.R. Leavis の *Mill on Bentham and Coleridge* を読んだ。担当の山本和平先生は、少々型破りな愛すべき先生で、100 分授業の半ばまでさしかかると、「ちょっと煙草を喫わせてもらうから、よかったら君たちもどうぞ」と煙草をふかせるのがつねだったし、「このところは私にはよくわからないんだが、君たちはどうかね？」と訊ねることしきりだった。F.R. Leavis は悪文で名高い批評家で、これも後年手元に残っていた本を開いて読んで、判読に苦しんだ。当時も、山本先生に意味不可解な一節が私に理解できた筈はないが、それでも一度自説を口にした記憶があるから、相応に英語を読む力があり、自信があったものと見える。共通一次試験が導入されるまでの「有名大学」入学者の英語の語彙は 7000 語から一万語程度だったから、シェイクスピア



などの戯曲や詩、informal な表現の多い文学作品でなければ、たいていのテキストは辞書を引きさえすれば理解できた。(因みに東京大学でも調査したことだが、共通一次試験が実施されて5, 6年後、この学生の獲得語彙数は4千語から5千語の水準にまで低下して現在に至っている。)

Leavis の著書は本格的な英文学の批評というジャンルに属するにも拘らず、私が皆目英文学に接しているという実感をもたなかったのは、そもそも当時は英語よりドイツ語に関心があったせいかもしれない。入学手続きの際、前期で選択した所謂「第2外国語」はフランス語で、クラス編成もこのフランス語に基づいて行なわれたが、2年生になったころには、ドイツ語を使いこなせるようにというので、1年生のドイツ語クラスを無断で聴講したり、ドイツ語で日記をつけたりしていた。夏季休暇の帰省中には、阿南高専の教師による徳島市主催のドイツ語市民講座に通った。(第一次世界大戦中、約1000名のドイツ人捕虜を収容し、後年ベートーヴェンの「第九」演奏で知られるようになった板東俘虜収容所が県内にあったため、この地方都市はドイツ語と深い因縁で結ばれていた。)小平の講堂前のベンチで「外国人教師」のグライルさんが坐っているのを見つけて話しかけたのも、おそらくその市民講座の10数名の参加者の一人、阿南高専の高校生が担当教師とすべてドイツ語で話すのを見て驚いたためと思える。

しかし、私がドイツ語を勉強しようと思った理由は唯一、『資本論』を原書で読破したいというところにしかなかった。高校3年の終りごろに偶然手にした樺美智子『人知れず微笑まん』に感化されたためであり、その伝でゆけば、本来、入学手続きの際にはドイツ語を選択外国語にすべきであった。振り返ってフランス語を選択した理由は、高校時代にロマン・ロランを愛読したこと、ドイツ語は「つぶしがきかない」と思ったところにあるような気がする。後者に関しては、既にある程度まで英語を習得した日本語を母語とする者は、英語と同じゲルマン系の言語ではなく、ラテン系の言語を学ぶ方が理にかなっているから、私の選択が間違っていたとも言えないが、いずれにせよ2年生になったころには、明けても暮れても大月書店のマルクス・エンゲルス全集の一卷を読んでいた。

そういうわけで、3年生になってゼミナールを選択するときには、当然のようにマル経の種瀬茂ゼミを選んだ。かりに文学に関心があれば、「共通ゼミ」という制度により、他学部の語学教官のゼミを選び、文学関係の卒論を書いて卒業する道は開けていた。私自身はこれに該当しないが、後年、一橋大学が少なからぬ数の文学・語学研究者を輩出したのは、ひとえにこの制度の賜物である。

後期(3年、4年)在学中に原書で接したフランス語の著書は、出口裕弘先生の授業のAndré Breton, *Nadja*のみと記憶する。前期課程のフランス語の授業では、鈴木道彦先生がJean-Paul Sartre, *Que peut la littérature?* をテキストに用いていたし、海老坂武先生の授業でFrantz Fanonを読んだ気がするから、当時最先端をゆくフランス文学・思想の研究者を通じてフランス文学と思想に接したことになるが、鈴木道彦先生にいぶし銀のような



魅力がそなわっていると思ったことを除けば皆目記憶がない。

3 年生の冬に、「革命に醸す青春——奥浩平論」を書き、翌年 3 月、『ヘルメス』（一橋大学が発行する学部学生対象の雑誌）に投稿して掲載された。『青春の墓標——ある学生活動家の愛と死』という、在学中に自殺した早稲田大学の学生の遺稿集を批評したもので、私が書いた最初の文学評論と言えるかもしれない。奥浩平は私より 3 歳年上、自殺したのは私が 1 年生のとき、樺美智子の死に触発されて活動家になったというから、同時代人の短い生涯が孕んでいた問題が、自分自身に突きつけられた課題として受け取られたのであろう。その遺稿集を、鑑賞の対象としてではなく、読者が追体験すべき生として受け止めたことは、文学作品に対する私の姿勢を既に決定していたような気がする。

4 年生のとき原書で読んだ英語の小説に、D.H.Lawrence, *The Plumed Serpent* がある。メキシコの地で、ケツアルコアトル（羽毛のある蛇）を祭る宗教と宗教団体を基礎に、社会改革を企てる運動に、アイルランド人の女性が巻き込まれるという小説である。辞書を引かずに難なく読了できたのは、先に触れた当時の大学生の英語読解力は、ジョイスの後期の作品などを別にすれば、普通の小説を読む水準に届いていたということであり、それは、高校 2 年の夏休み中に、新潮社の世界文学全集の一巻として収録されていた *Lady Chatterley's Lover* の巻末に伊藤整が引用していた削除箇所が難なく理解できたことと同断である。『羽毛のある蛇』は、他校在学中の友人がロレンスで卒論を書くと言われ、単なる好奇心から繙いたにすぎないが、高校時代に読んだラフカディオ・ハーンの数編の短編小説と『新約聖書』の英語訳を除けば、英語の勉強の一助としてではなく、文学作品として通読した最初の小説だったことになる。

とこうする内、卒業後の進路を決めねばならない時期が来た。既に一般企業に就職する気はなかったため、やむなく大学院を進むことにしたが、10 月に、経済学研究科ではなく、社会学研究科を受験したのは、すでに『資本論』をとこるところ原書と突き合わせて読了し、種瀬ゼミと入学直後に入部した「社会科学研究会」でマルクス経済学の概略を理解していたため、むしろさらに進んで、その基本的概念の人間学的基礎について研究したいと思ったからである。容易に想像できるように、そういう問題意識はサルトルの『弁証法的理性批判』（*Critique de la Raison Dialectique*）に多くを負っている。古賀英三郎先生の名講義がその発端であったか、あるいは竹内芳郎著『サルトルとマルクス主義』に感化されたか、記憶は定かではないが、そのころには『存在と無』をも含め、人文書院のサルトル全集をすべて読んでいた。当然ながら、大学院の入学試験の外国語には英語とフランス語を選んだ。卒業論文のタイトルが『方法の問題』についてになったのも自然の成り行きなのであろう。

したがって、大学院入学後のゼミナールの指導教官は古賀英三郎先生に決めていたが、あいにく古賀先生は 4 月に海外研修のためフランスに旅立たれた。やむを得ず、社会学部長を務めておられた中国思想史が専門の西順蔵先生のゼミナールに籍を置くことになった



が、無論中国語のイロハも知らない人間がゼミナールに出席できる筈もないから、手持ち無沙汰のまま、休暇中には奈良の古寺を訪ね、山之辺の道を歩いたりした。クラシック音楽を聴き、文学書を漁るのが、東京での日常であった。小林秀雄全集とドストエーフスキ全集を全巻読み、そののちに、図書館で偶然見つけた保田興重郎著作集を繙いた。詩作に手を染め、リルケの『時禱詩集』(*Das Stunden-Buch*)のドイツ語の美しさに驚嘆したのもこの頃のことである。1986年に書いた「某日、保田氏に至る」には次のような一節がある。

「大学院には入ったものの、その頃には皆目学問といふものをする意欲がなかつた。「なるほど学問はあるかも知れないが、お前は哲学者ぢやなくてごろつきだ」——。ドストエーフスキがドミートリ・カラマゾフに語らせた言葉に違はず、自分もまた「ごろつき」の仲間入りをしようとしてみると気付くだけのために、大学で過した四年間を棒に振った人間には、既に自分で物事を思量し、文章を認めるといふことが出来ないのであつた。」

学問的には無為に等しい日々を重ねるうちに、社会科学というものに対する関心は、私の皮膚をすり抜けて人文科学の領域に紛れ込んでいたような気がする。植田敏郎先生の『ファウスト』の講読は単位を取るためだけに履修した科目であるが、富原芳彰先生の『ハムレット』と『オセロ』講読に出席したときは、文学書を読んでいるという自覚があった。しかしシェイクスピアの英語はやはり難しく、字面は追えたものの、結局のところ何が書かれているかが解らず、翻訳を始終参照したから、一作を通して読んだことにはならない。増谷外世嗣先生の授業をとったのも履修単位を満たすためでしかなかったが、イエイツ(William Butler Yeats)を中心に現代詩研究を専門分野としていた増谷先生は、英文学研究者の枠にはいかようにも収まりきれない不思議な人だった。学部の前期課程の授業に現れた先生は、白髪豊かな巨軀を除けば、不機嫌をもてあます退屈極まりない教師に見えた。しかし、大学図書館の2階にある研究室で、数名の学生とスペンダー(Stephen Spender)の*The Struggle of the Modern*を読む先生は、くつろいだサロンでグラスを傾けながら談話しているような、人懐っこい、それでいて人生の酸いも甘いも噛み分けた、矛盾の塊りのような人だった。こういう人が英文学を専門にしているからには、事によると英文学も存外おもしろい学問なのかもしれない。そう思った瞬間に、私は英文学研究の「とぼ口」に立ったような気がする。

増谷先生のゼミナールに正式に所属する手続きをとり、英文学研究に欠かせないラテン語、英語学、英文学講読、英語科教育法、「英語」などの学部後期科目を履修した。英語科教育法と「英語」の担当者は佐々木高政先生で、受験期に『和文英訳の修業』で馴染みのあった佐々木先生は、後者の授業で宮沢賢治の童話を英語に訳させた。担当箇所を割り当てられた学生が、事前に語学研究室に訳文の原稿を提出し、助手によってタイプ・印刷されたハンドアウトを用いて添削するというものである。まだタイプライターを持っていな



かった私には、自分自身の autograph が活字に変わっているのを眼にすること自体すでに新鮮な体験であった。(因みにワープロで原稿を書く当今の人間には想像できないかもしれないが、自筆原稿が活字になり、あたかも他人の書いた作品に接するようにそれを読むことは執筆の楽しみの構成要素でもある。(日本語に関しては既に「奥浩平論」で経験済みだった))。

私に割り当てられた童話のなかに、「お食べ。お食べ。」という台詞があった。私はそれを”Have it. Have it.” と訳したように記憶するが、佐々木先生は、それが楽しくて堪らないとでもいうように、微笑を浮かべながら、“Try a mouthful!” と直された。そのとき、日本語の文章を英語で「表現」することと所謂「和文英訳」との違いに加え、英語で文章を書く喜びと、「英語」を教える極意が、私にも実感できる気がした。「英語」の授業とは、佐々木高政先生が発散するオーラに他ならなかった。それは、高校 1 年のとき野太い風貌をした京大出の大越先生に教わった「古文文法」、3 年生のとき、歌人でもあった斉藤先生の古典の授業で教わった「源氏物語」、母校に講演に来られた田上譲治一橋大学教授の「憲法」の場合と同様である。つまり「学問」とは、それを行なう人間に蓄えられた知識と感性の総量のことであり、それを伝えるとは、その人間に触れさせることである。したがって「学問」を伝授するには、伝授するものと習うものが、共通の空間に居合わせ、共通した空気に包まれねばならない。それは、同じ頃紀伊国屋ホールで観た、つかこうへい作「銀ちゃんのこと」(主演、柄本明、風間杜夫)と、数年後に歌舞伎座で観た、中村歌右衛門の「東海道四谷怪談」の場合に似ている。演劇も、台本と役者と舞台と鳴り物によって成り立つわけではない。観客が、自らとそれらを包摂する空間をつくりだすときにのみ、ひとつの出し物の姿が顕れる。役者の風姿、挙措、台詞回し等、つまるところ役者の全存在が、観客の全存在と共振するとき、戯曲というテキストが語り始める。

「英語」は、どうやら私がそれまでに考えていたものとは違っている。——多分そう思ったために、佐々木高政先生が書かれた、*The More Deeply You Read* という教科書の教授用資料を買い求めて熟読した。教師のための所謂「虎の巻」であるが、先生の肉声が届いてくるような、懇切丁寧な情報を満載した大部な著書だった。このころから努めて英和辞典を用いないようにし、POD (Pocket Oxford English Dictionary)、COD (Concise Oxford English Dictionary)、OALD (Oxford Advanced Learner's Dictionary) を常用したのも同じ理由による。つまり、ある言語の単語と語句の意味するものは、出生の瞬間からそれに包まれてきた母語話者には感触として了解されるが、第二言語としてそれを学ぶ者には、結局のところ理解できない。にもかかわらず、想像力で擬似了解の領域に入るには、他ならぬその言語で表現された説明文を読み、そこに出てきた単語をまた辞書で引いてその説明を読むという悪無限を敢行するしかないということである。

英語が話され、自らも英語を話す場所に、出来るだけ立ち合う機会を作ろうと思ったのも、ほぼ同じ理由によるが、案に相違してこのことが容易に実現したのは、大学のキャン



パスの南、谷保駅に近いところにキリスト教教会があり、アメリカの（おそらくその宗派の）神学校に在籍する学生が無料「英会話」クラスを開いていたためである。私とほぼ同年齢のその学生は、「英会話」などを教える気がなかったのか、J.D. Salinger の *The Catcher in the Rye* をテキストにして受講者と議論を交わしていた。ジョン・アウインガーという珍しい名のその学生教師も受講者も、すべて 20 代の青年男女だったから、クラスの授業はかならず居酒屋での談話に引き継がれ、のちには個人的な交際にも変化した。米語で書かれた文学作品を米国人と一緒に読むことが、その作品の世界だけでなく、作品の書かれた世界をも垣間見させることになったのである。

英文学研究の場合には、しかしそういうことは望むべくもなかった。読者である一人の私が、白地に黒で印刷された文字群に向き合い、まずは視覚により、次には集積した知識と乏しい経験を喚び起こし、想像力をめぐらせてひとつの世界を創り出さねばならない。首尾よくその作業を終える過程で、一人称でもあれば三人称でもある語り手と、作中人物、作中人物が生きている環境、そこに生じる、あるいは目覚しいことは何も起こらない彼らの人生、等についての好悪の判断が形成されねばならない。つまりは作品と読者が共振せねばならないということであり、文学鑑賞とは詰まるところその共振の謂いであるが、文学「研究」はそこに安住することができない。共振のなかでその質を問い、不協和音しか聞こえてこない場合にはその原因を考えるとときに「研究」はその緒につく。

W.B. Yeats、W.H. Auden、T.S. Eliot などの詩は、私を鑑賞の域外に連れ出すことがなかった。“The Wanderings of Oisín” という初期イエイツの長詩を、土井晩翠のホメロス訳に倣い、文語調、歴史的仮名遣いで訳すことができた程度であった。

小説では、Joseph Conrad、D.H. Lawrence、Henry James、William Faulkner、Virginia Woolf を好んで読んだ。なかでも *Mrs Dalloway*、*Absalom, Absalom!*、*The Wings of the Dove* には感心させられたが、研究の対象にはなりそうもなかった。修士論文の準備にとりかからねばならない時期に、さてどうしたものかと考えめぐりながら手に取ったのが、ロレンスの “The Prussian Officer” という短編小説だった。プロシアの軍隊が、炎天下、白雪を戴いたアルプスの山嶺を見ながら行軍する印象的な場面で始まるその小説は、大尉とその従卒の間に起きるさまざまな出来事と、大尉の死後は従卒と周囲の自然との係わりをめぐり、謎めいた文章を満載した小説であった。作中人物の心理ではなく、あくまでも具体的な事柄と具体的な情景を叙しながら、それが意味することと、なぜそういう文章が書かれねばならないかが解らないという意味で謎であるような小説である。首尾よくその謎を解き、それを作者と作者の他の作品と関係させて、謎は常識に囚われた読者にとって謎であるに過ぎないことを立証できれば、一編の論文が完成したことになる。そう考えて再読、三読したのが、私の「英文学事始め」だったと思える。

「死界と闇——D.H. ロレンスの直観をめぐって——」と題した論文が完成した後は、英文学研究の道は比較的なだらかだったようである。かなりの分量の修士論文 “Inhumanity



and Tenderness in D.H.Lawrence's World” を英語で書いたときに、英文タイプを打つことも含め、少しく険しい坂を上ったような気もするが、取り立てて言わねばならぬほどのことでもない。ただこの論文は活字になっていないので、最後に付け加えると、この論文の眼目は、ロレンス自身の資質である「優しさ」と「酷薄さ」という矛盾する二つの要素が作品にどのような割合で現れるかを基準にすれば、ロレンスの主たる作品はすべて説明できるというところにあった。そういう観点は、当時ははっきり意識していなかったように思うが、吉本隆明が『言語にとって美とはなにか』で日本近代文学を論じる際に「自己表出」と「指示表出」という二つの言語機能を軸にしたことに似ている。吉本隆明の方は、明らかに『資本論』の「価値」と「使用価値」という二つの要因にヒントを得ているから、見ようによっては、私も大学入学後の数年間を費やした著書に先祖がえりしたと言えなくもないのである。

